



鳩山一郎会長と歓談するマレーシア青年クラブ連盟代表
(10月30日)

アジアセミナー

協同事業を決める

国際理解をめざした調査活動

さらに強めた友好の絆

アジア地域六ヶ国の青年活動指導者を招いて開催した、第六回友愛・アジア青年指導者セミナーは、来る10月31日、一週間にわたり、日本を無事に終る開幕した。二七日には日本を討論会を開き、各國の学校教育制度の基礎的な理解、②参加目的などの協議活動を行なった。

子供たちは、われわれの国をどう理解しているかの実施について議論され、調査活動はだんだん取り組み始めるとして、一致した。このような継続的な協同事業を作つたのは初期的なことである。友愛セミナーの新しい一步を踏み出したむじで、今後の成長が期待されている。今回参加した香港青年クラブ、インドネシア・バリ青年クラブ、デュランク・ケンカナ芸術学会、マレーシア青年クラブ連盟、シンガポール少年クラブ連盟が、サイアム青年クラブの代表二四名は、10月16日から東京、岐阜、鶴岡の各地で暖かく迎えられた。それらの研修地では、相理解の出発点となる異文化の衝突波と新たな友情の南風を吹き飛んでいった。

（10月16日、午後一時半）

（10月30日）

支部長・村瀬弘行 マレーシア代表が到着、その後（10月30日）

（10月30日）

（10月30日）</p

主 張

生活に根をもつ運動を！

友愛が「地域文化の伝承と創造」というテーマで「社会開発セミナー」を行うことは、今日の私達の状況にとってまさに意義深いものと確信している。

むじろその「都市計画」とわれわれの指向するまちづくりとは、「一律背反」の関係にさえなつてゐる。机上の「プラン」である都市計画を推し進めねばするほど、地域の人々との横の交流、あるいは老人・壮年・青年の縦のつながりを失わせたのではないか。

これらはつまり都市を形の上で、「合理化」、「機能化」させようとした結果に他ならない。それが現代における都市の砂漠化の実態と表現される原因であり、その意味でまさに人間不在の「町」である。

換言すれば「人間」とか、「地域文化」とか、の重要な「視点」を欠落させたまま文字通りコンクリートの都市を造ってきたのである。当然のことながらその「都市計画」は「人間第一主義」、あるいは「地域文化最優先のまちづくり計画」でなければならなかつたのである。われわれが指摘するのはまさにこの点にある。

しかし今、改めて「地方の時代」であると主張するつもりはない。いつの時でも老、壯、青の三世代が、縦横にその円滑な適合をしながら「住むべき」なのが地域生活であり、それが本来の意味での「地方の時代」なのである。一時「住民参加」という言葉が流行したが、代案も出せぬままに行政に取り込まれてしまふような体裁だけの参加は害あつて益なしである。また、単に阻止するためだけの運動や、告発などの拒否的な姿勢でも眞の「まちづくり」にはならない。ましてやわれわれ青年が「無言」でいることはすでに許される状況ではない。

地方の支部で実際に活動している同志のみなさんにとって、今回のセミナー開催準備は容易なことではないと思われた。しかし考え方によつては、今回こそ友愛精神、つまり人間自身を目的とする思想、を大いに發揮する絶好の機会であると言えないだろうか。文化にとって地方もなければ中央もできない。あるのはそこに住む人々にとっての生活であり、文化である。その視点に立脚してこそ友愛が眞の地域の担い手になり得るのだと思う。八〇年代の眞の「人間コミュニケーション」を目指して「確たる一步」を進めていきたい。



岐阜市役所では時田市長を囲んで懇談会

東南アジア諸国との連帯は 友愛の架け橋で！

運動への理解獲得

岐寧文部
樞本修

清洲支

清洲支部 角渕 美雪

ことだけはわかつてもらって一安心した。

一〇月二〇日土曜日。台風一過の抜けるような青空。午前の学校

「異文化の衝撃波」と「友好の南風」を残して行った第六回友愛講演会。アジア青年指導者セミナーの参加者たち。事業の運営にたずさわり、彼らの受け入れに係った一人ひとりの脳裏に、鮮烈な思い出を刻み込んで行ったようだ。衝撃波をまともに浴びた仲間たちの投稿編をお届けしよう。われわれは、異民族や異文化にほとんどぶれることがなく生活している。だから、外国人の接触を緊張して迎える。そして、握手と笑顔。すぐに遠来の客は永年の友になってしまう。いや、そう思い込んでしまうのである。われわれは、彼らをとおして異文化の入口に立ったのだ。ひと時の思い出に終らせず、ドアを開けて踏み込んでみようではないか。旅行ガイド・ブックを読むことからでも良いのだから……。

追憶のホームステイ

保育園の子供と踊る（愛知・瀬洲）



名酒「大山」で庄内支部では大宴会

